那須雅吾先生のこと

吉　村　宏　一

那須先生と言えば，どういうわけか，お兄さんの「那須」頼雅先生のことがまず頭に浮かんできます。それは，多分，私が同志社に勤めはじめてから長いあいだ雅吾先生のことを「赤木」先生と呼んでいたせいかもしれません。それにしても，20年あまり前初めてお会いしてから那須先生はほとんどお変わりになっておられないようです。その頃は新町の尋真館に研究室があった頃ですが，40代の働き盛りだった先生は，4階のエレヴェーターを下りたところの一見ラウンジ風に囲った教員のたまり場で「松の屋」の丼を食べながら，「同志社の英語教育をどのように展開してくべきなのか」，「専任率を守るにはどうしたらいいのか」などについて，他の先生方と真剣に話しておられたことを思い出します。

きっと私の錯覚だろうと思いますが，当時は時がゆったりと流れていて，誰もがのびやかに暮らしていたような感じがしてなりません。英語科の研究室が，その後徳照館に移り，さらに田辺の香柏館へと移ってきましたが，多分そのせいでしょうか，私自身，尋真館での時代がはるかかなたに遠のいたかのような印象にとりつかれているのでしょう。恐らく那須先生と尋真館とのイメージが私のなかでどこか深く結びついているせいでしょうか，那須先生のご退職の話とともに尋真館での時代が「古き良き」時代のようなイメージとなって浮かび上がってきて，やや懐古的な気分に陥っているのかもしれません。

那須雅吾先生は，1959年に同志社大学文学部英文学科の大学院修士課程を修了後，帝塚山学院短期大学英文学科に勤務され，同志社大学には1963年に

来られました。経済学部に所属され，大学評議員や学部の教務主任，学生主任などの役職を果たされる一方，同志社の英語教育にも深くかかわってこられました。とりわけ，大学紛争の余波が残る状況のもとで，若くして英語科目主任の重責を担われ，数々の難問を処理されたと聞いております。先生は，ときどき，当時のことを懐かしい想出話のように語られることがありますが，その話を聞いていると，いつの時代であろうと，その時その時，深刻な問題がありそれにともなう苦渋に満ちた決断があったことが，それとなく伝わってまいります。先生は，歴代の英語科の主任たちがやってこられたことに対してそれほど強く批判されず，むしろ積極的に協力されてきたのは，若い時の厳しい経験や主任の立場への思いやりの故ではなかったかと推測いたしております。

先生は，若い頃，W．M．サッカレーやE．ブロンテについて論文を書いておられますが，1964年に『人文学』（同志社大学人文学会）第75号に発表された「*Tess* についての一考察——三人のテス」以降，一貫してトマス・ハーディの研究に打ち込んでこられました。1967年，『人文学』第95号で発表された「Hardyの小説における人間像」では，ハーディの描く主人公たちの特質や特徴について論究されていたり，1972年，『主流』第33号に発表された「T.Hardyにおける 'Nature' の意義」では，ワーズワスの「自然」とハーディの「自然」との違いを論じられていたりして，ハーディという大作家を多様な視点から捉えようとされています。なかでも，1982年の「『テス』への一道標—'Cross-in-Hand'—」（『主流』別冊）は実に示唆するところの多いユニークな論文であります。先生は，1975年から76年にかけてケンブリッジに留学されていますが，在英中，ソールズベリー大寺院を訪ねられた時に発見された「異様な石柱」の周りの土を掘り起こし詳しく調査された結果，この 'Cross-in-Hand' がキリスト教にかかわりのあるものではなく，異教的な「両性具有の偶像崇拝」を表わすものであると結論づけられ，それを『テス』との関連で論じられています。さらに，「トマス・ハーディと日本」（『主流』，1984年）も，

日本と無関係と思われていたハーディと日本との関係を，E．ブランデンやT．E．ロレンスとハーディとのかがわりという視点から論究されており，これまたユニークな論と言えるのではないでしょうか。

那須先生は，1976年から現在まで，日本ハーディ協会の評議員を，また1993年から94年にかけてはハーディ協会『会報』の編集委員として活躍され，日本におけるハーディ研究を支えてこられました。さらに，1986年には19世紀英文学研究会を組織され，その代表者として活躍されてきました。1995年7月に英宝社から出版されました19世紀英文学研究会編（編集代表・那須雅吾）『「テス」についての13章』は，先生が尽力されている研究会の活動が結実した見事な成果だと言えるでしょう。なかなか好評で，再版が出たと聞いております。一時，先生に会うたびにこの論集の話をされ，まさに「血道を上げて」おられるような感じさえいたしました。先生は相当な蔵書家で，特にハーディに関する貴重な文献をたくさんお持ちです。いつぞや洛北の岩倉に住んでおられた頃，先生のお宅にお邪魔した時，貴重な文献がぎっしりつまっている書棚に圧倒されたことを思い出します。先の論集には，幾つかの楽しいイラストが入っていますが，それは先生のお持ちの貴重な本からとられたものです。この論集に関連する話として，そのイラストの写真を撮るために一夏費やされたというようなことも聞きました。古い書物から図版を印刷の製版用にきちんと写し取るために，図版撮影用の道具や特殊な写真機を購入され，一夏かけて，何度も何度も撮り直したというお話でした。そんな話を聞きながら，やるからには自分が納得のいくまで徹底して行なおうとされる研究者としての先生の厳しさがうかがわれるようで，なんとも言えず，楽しくほのぼのとした気分になったのを憶えております。

現在，先生は近々出版される著作に取りくんでおられると聞いております。この著作を完成されるにあたって，先生は，今回，いったい何に「血道」を上げられたのか。出版後その話を聞かせていただくのが今から楽しみです。